

論文の内容の要旨

論文題目

近代日本における参詣空間の創出に関する研究
-明治期から昭和前期にかけての参詣をめぐる社会的文脈と空間づくり-

永瀬 節治

本論文は、近世までに成立し、現在へと受け継がれる、信仰と余暇の両面を孕んだ社寺参詣の文化と、その受け皿としての「参詣空間」のあり方を基軸に据えながら、明治期から昭和前期に至る近代の社会的・地域的文脈のもとでの、参詣をめぐる空間づくりの実像を捉えるものである。各章の要旨は以下の通りである。

序章では、「参詣」という行為を取り巻く一連の空間を「参詣空間」という語で定義し、研究の目的として、(1)参詣空間の成り立ちや特質、近代における継承と変容のありようを、それを促した社会的文脈のもとで明らかにする、(2)近代における特色ある参詣空間の創出のありようを具体的に跡づけ、空間の近代性ととも、そこに働いた地域的意図、そのような空間づくりが当時の地域社会において持ち得た意味を明らかにする、(3)現代の参詣空間を手がかりとした地域づくりや、地域性に根ざした空間づくりへの示唆を得ることを掲げた。また近代を捉える視点として、神社のあり方を規定した国家神道、遊覧行動を促進した鉄道、空間計画技術の導入の様態に着目し、(2)に示した具体例として、国家的神社をめぐる空間創出を取り上げることを示した。

第I部「参詣空間の成り立ちと近代における展開」では、オギュスタン・ベルクが日本の風土を捉える上で提示した<通態>の概念、すなわち自然と文化の相互作用の構図から示唆を得ながら、自然世界に霊性を見出す風土的素地のもとで、聖（信仰）と俗（娯楽）を併せ持った社寺参詣の文化、境内に門前町を付随させた参詣空間が成立し、それが近代へといかに受け継がれ、変容していったのかを、俯瞰的に検討した。

1章では、自然と結びついた地縁的な信仰環境から、遠方の神仏を拝しに赴く社寺参詣の文化と空間が成立・展開する過程を辿った上で、その近代の様相を規定していった社会的・空間的作用について論じた。

柳田國男によれば、参詣行為の生成は、地域共同体の祭祀（祭り）から、地縁にとられない個人的な信仰行為が分化してゆく過程として捉えられる。律令期の神祇制度による神社の組織化、また神仏習合の進展により、広域的に信仰を集める神仏の霊地が各地に生まれ、信仰と遊覧の両面を備えた社寺参詣が庶民に普及する近世において、社寺を中心とする聖域（境内）と、それに付随する遊興的領域（門前町）が、参詣客の動線（参道・参詣道）のもとで併存・融合する参詣空間の典型が成立した。そうした基本的な構図は、近代へと受け継がれたが、参詣対象としての神社を公的に規定した国家神道、広域的移動を促進し、国内観光を促進した鉄道が、聖俗両面を増幅するとともに、近代の空間計画技術が、それらを整序する役割を果たすこととなった。

2章では、明治期から昭和前期に至るまでの近代の参詣空間の展開を、次の3つの観点から俯瞰した。

第一に、境内の公園化、神苑・外苑の普及、参道の近代化、門前町の形成・再編といった空間構成要素の展開、第二に、近代の創建神社をめぐる空間創出のありよう、第三に、周辺環境を規定する制度・施策との関係に着目し、伝統的な構成を継承しつつも、近代の社会状況と計画技術の進展に応じて創出・改変されてゆく過程を辿った。明治初期の公園地指定が、前近代の社寺の実態を追認したものであったのに対し、やがて神社は、森厳な神域を理想とする空間観念のもとに捉えられるようになるが、その影響が顕著に見出されるべき神苑や創建神社の空間も、実際には国家的な意図以上に、地域の側の思惑に規定され、時に俗的要素を取り込みながら創出されていった。

観光施策が活発化する昭和前期にかけて、参詣空間が孕む聖俗両面は、保護と開発の相克的構図へと置き換わりながら、風致地区や国立公園といった計画的枠組みに包摂される。そして皇国史観と結びついた宇治山田の神都計画も、パーク・システムの導入による遊覧都市計画の延長線上に構想されていったと言える。

3章では、参詣地の様相を大きく変容させたと考えられる鉄道等の交通機関に着目し、参詣地における受容のあり方を捉えた。参詣客輸送を積極的に担ったと考えられる計121の「参詣路線」（鉄道、ケーブルカー、ロープウェイ）を抽出し、それらの全国的な開業動向を捉えた上で、抽出された路線の参詣地空間における敷設のあり方を、参詣地への「到達形態」、複数路線・駅の「集積形態」という2つの観点から類型的に捉えた。これらの路線は、地形条件や既存の門前町の空間構造に規定されながらも、参詣客の利便との兼ね合いの中で立地が選定され、参詣空間の新たな要素として挿入されていった。さらに「参詣路線」が相互に結節され、新たな巡礼路の形成が図られるケースもみられた。これらの路線敷設は、既存の参詣道に沿って形成された参詣地の空間構造を、駅を起点として再編するとともに、誘客による地域振興の契機となったことを指摘した。

さらに付論として、大正期から昭和前期までに竣工した代表的な「社寺風駅舎」に着目し、それらの竣工をめぐる地域や事業者の動向、時代背景によるいくつかの文脈を整理した。

第Ⅱ部「近代における参詣空間創出の実相」では、国家的神社を擁する地域における参詣空間創出の具体的事例を取り上げ、その経緯・内実を、4、5章については郷土意識の表出のあり方、6、7章については、観光施策や地域振興の動きとの関わりに着目しながら検討した。

4章では、明治末年の国鉄大社線の敷設を契機とした出雲大社・神門通りの創出過程を跡づけた。

参詣客輸送を企図する鉄道院によって開設された大社駅は、門前の東西二地区による誘致争いを経て、市街地から離れて立地し、県の直轄で新たな参詣道（神門通り）が計画された。県費による来訪者本位の道路整備に対しては、その必要性を疑問視する声もあったが、計画を主導する高岡直吉知事は、「天下ノ大社」のために必要であることを訴え、予算が承認された。この道路は当時の県道としては相当広い6間の幅員に加え、微高地に達して旧参道に連なる象徴的な軸線を備えており、その起点となる橋には、大社への「関門」として特別な設計が施された。また県内出身の高岡には、前任地の宮崎において、宮崎宮（現宮崎神宮）の整備事業を知る経験があり、出雲大社への貢献意識に影響を及ぼしたことが窺える。

道路開通の翌年、同じく県内出身の篤志家により、橋詰に鉄筋コンクリート造の新大鳥居が建造され、沿道に松並木が植樹されることで、象徴性が視覚的に補強された。当時は並行して神苑の構想も進められており、通りの景観創出は、神域を拡張するものとして捉えられていた。

県外からの来訪者を意識したシンボリックな参詣道は、二人の郷土出身者の尽力によってもたらされたものであり、島根県の拠り所としての出雲大社の性格を視覚化したものでもあった。

5章では、大正期の東京市区改正事業により計画された、明治神宮表参道の成立過程を跡づけた。

帝都に誘致された明治神宮の造営に際し、表参道については東京市に計画・整備が委ねられ、市区改正委員会でその内容が議論された。多数の参拝者に対応した記念碑的道路のあり方に対し、計画側は歩道幅員と植樹帯の充実を訴えたが、将来の自動車交通を重視する意見が強く、最終的に幅員20間、両側歩道各4間の1等1類街路として決定された。鎮座祭前に歩道を3間で施工する手違いが発覚し、舗装・植樹もなされないまま供用が開始されたため、造園界からは中央部に参道を配する改良案も提示されるが、利用実態が当初設計への改修の必要性を浮き彫りにし、翌年の都市計画委員会において、改修計画が承認された。

表参道の櫛並木は、4間の歩道が確保されたことで、近代街路樹として初めて本格的に導入された。樹形の優れた櫛並木は、参拝道路の森厳な風致の創出に相応しく、武蔵野を特徴づけるとともに、関東に著名な櫛並木の参道があることも考慮されたと考えられる。関東大震災後の市街化の進展の中でも、風致地区指定により森厳性の維持が図られ、新たに石灯籠が設置される等、参拝道路としての性格は戦前期を通して保たれた。

東京を代表する近代的な並木街路は、「参道」としての性格を明確に付与されたことで、全国から参拝者を迎える神宮に対する東京市の気概や、武蔵野の地域性を反映しながら、成立をみたものであった。

6章では、大正期から昭和前期にかけて実施された出雲大社の神苑整備事業を跡づけるとともに、並行して活発化する島根県の観光振興の動きを捉え、両者の関係性について検討した。

神苑整備の嚆矢となった伊勢の神苑会は、明治後期にかけて種々の誘客施設を整備したが、出雲大社の神苑も、鉄道敷設により参拝客の増加が予想される中で具体化した。神門通りの計画と並行して、当初の設計が宮内技師・市川之雄に委嘱され、両者は一体的に構想されたことが窺えるが、同設計は出雲大社に相応しくないと判断され、新たな設計が伊東忠太に委ねられた。神苑の設置は、俗的な要素を排除しつつ神域を拡張し、森厳な風致の創出を企図したものであったが、一方で旧参道の松並木を保全する意図も存在していた。国費補助の決定、神苑会の設立を経て大正後期に着工されるが、併せて大社駅は壮麗な社風駅舎へと改築された。

県を挙げて神苑整備が進められる昭和前期にかけて、一方では観光振興の動きが活発化していった。昭和5年には県観光協会が設立され、積極的な誘客施策が展開されてゆくが、その中で、出雲大社は島根の観光のイメージの中心に据えられた。神域の森厳さを確保するとともに、誘客施設としての側面を孕んだ神苑の両義性は、やがてその延長としての神門通りに、松並木と門前町が併存する、独特の景観をもたらした。

大社駅・神門通り・神苑という、「三位一体」の近代参詣空間は、出雲大社を拠り所とする郷土意識と地域振興への期待が束ねられることで、実現したものであった。

7章では、紀元2600年記念事業による、橿原神宮を中心とする空間整備事業の経緯と背景を跡づけた。

神武天皇の即位地とされる畝傍山麓に、明治23年に創建された橿原神宮では、大正期に拡張事業が進められる中、境内近くに大軌の駅が開業し、周辺には商店が集積しはじめた。俗化を憂慮した神宮と県では、駅と境内の間に県営公園（外苑）を設置するが、昭和8年頃から、中央で紀元2600年記念事業を画策する動きが現れる中、奈良県や畝傍町長の働きかけにより、奉祝記念事業の第一に橿原神宮境域の拡張整備が掲げられた。これは民家移転や鉄道線路の移設・総合駅の設置を伴うものであり、都市計画街路事業と土地区画整理により事業の円滑化が図られる一方、奈良県により橿原道場（外苑）も整備され、3年足らずで完工した。境域を中心に参拝道路・市街地・鉄道・外苑を配した総合的な空間計画は、地域性を取り入れた意欲的な内容であった。

こうした「神都」の都市計画は、畝傍町長が要望したものであり、先に構想されていた宇治山田の神都計画の影響も窺える。一方、宮崎神宮を擁する宮崎市でも同名の都市像が描かれた。これらは観光振興の流れの上に構想されたものであったが、戦時色が強まる中、奈良県では「建国の地・大和」を掲げて観光客誘致が推進

されており、紀元 2600 年はその好機でもあった。また奈良から伊勢に至る遊覧路線網を築いていた大軌においては、経営基盤である「大和」への貢献意識も醸成されていた。

地元側の思惑が交錯する中で実現した「神都」の空間は、聖俗の関係性を整序し、自然と都市とが融合した、近代参詣空間の一つの到達点であったと言える。

結章では、各章で得られた知見の整理を行うとともに、以下の総合的考察を加え、総括を行った。

まず近代の参詣空間をめぐる聖・俗の変容のあり方を考察した。各地に敷設された鉄道は、近世以来の行為の俗化（遊覧化）を加速させるとともに、社寺に依存する門前町に、駅という近代の都市性の拠点をもたらし、参詣地の俗化（商業主義化）を促した。一方、信仰対象である社寺の聖性は、根源的には自然環境と結びついたものであったが、国家神道のもとでの神社（特に官国幣社）には、「森厳」な空間性が求められ、それは林学・造園学の発達と相俟って、聖性を孕んだ自然環境（風致）を保持・増進する方向に作用した。

以上のような神社の参詣空間をめぐる聖・俗の相克的状況に対し、近代の空間計画技術は、一面において、前近代的な雑然とした神域を、国家神道の理念に適った空間へと、一元的につくり変える観点から導入された。しかし神社は本来、個々の土地の自然環境に根ざしている以上、それらの技術は必然的に、地域性と向き合うこととなった。また対象となる空間が、境内・境域から、参道・市街地といった周辺環境を含むスケールへと拡大する中で、自然（聖）と都市（俗）の双方を希求する論理を、計画的に整序する役割を果たしていった。

最後に、こうした空間創出が、近代の地域社会にとっていかなる意味を持つものであったのかを考察した。国家的神社は郷土意識の拠り所であり、神社の地位や外観を向上させ、アピールする動きは、地域の側から現れ、それは時に、近代化に遅れをとった地方に見出された。官国幣社の分布に体现される、国家神道の地政学的構図は、近代の日本の国土に、中央・地方の関係では捉えきれない独特の様相を与えていたと言える。

また参詣の対象であり続けた神社は、来訪者をもたらす存在でもあった。神社をめぐる郷土意識は、外からの視線を受けることで表出されると同時に、神社が引き寄せる参詣客は、地域に経済的な恩恵を与え、観光振興の動きを活発化させた。参詣空間が孕む聖・俗の両面は、地域の人々と来訪者双方にとっての価値へと転化され、地域性を取り込んだ特色ある空間づくりを促した。それらを主導したのは、地域の有力者や行政官であったが、そこには今日の観光まちづくりにも通じる、地域づくりの源流を見出すこともできよう。

以上の総括を踏まえつつ、現代の空間づくりへの示唆として、第一に、「文化的近代化遺産」としての参詣空間の保全・活用、第二に、来訪者の視線に立った、トータルかつ体験的起伏のある地域空間づくり、第三に、地域と来訪者の双方にとって価値ある参詣空間を、現代の文脈のもとで再生することを提言した。

最後に、参詣空間のあり方が本来的に示唆するのは、この国の風土において、都市と自然を切れ目なく捉えることの重要性であり、そのような空間づくりの萌芽が近代に見られたことも、記憶に留めておく必要がある。